病院図書室　13(3):85-89, 1993

〈特　集〉
外国雑誌の流通
と購入方式

外国雑誌の流通と納入システム

一見　益男

1．はじめに

自然科学の研究成果の発表は、雑誌論文において発表されるのが通例である。このことは医学の分野でも例外ではなく、最新の成果が一刻を争って専門誌で発表されていく。新聞の紙面で「○月×日発表の××誌によると」という形で研究成果の報道を見かけることが最も多いのも医学である。

そのため、電子媒体が増えたとはいえ医学分野における学術情報の入手ツールの内、最も重要なものの一つは、依然として学術雑誌となっている。この分野の図書室が最も予算を使い、担当者が利用者へのサービスで意を払うこととなるのも、学術雑誌、それも国際的な発表の舞台となる海外の学術雑誌である。

これらを含めた、いわゆる外国雑誌の納入方法が、昨今変わり始め、弊社においても新方式を発表し、2年目に入っている。

筆者は、㈱紀伊國屋書店に属してはいるが、編集部よりの希望は、外国雑誌の新しい納入方法を一般化した形で解説して欲しいとのことである。必ずしも、新サービスを実施している各社が同一の方法をとっているわけではないが、なるべく一般化した形で説明したい。ただし、具体例では、紀伊國屋書店のアクセス方式を例にとることを、あらかじめ御了解願いたい。

かずみ　ますお：株式会社紀伊國屋書店関西営業本部

2．外国雑誌の流通形態

従来の外国雑誌の入手方法は、おそらく日本で国際郵便により、海外から郵便物が入り始めた明治中期より変わっていないと思われる。出版社より読者へ直送されるというこの方法は、現在においても一般的な原則として出版社、読者双方より広く認知されている。

交通手段の発達に伴い、船便でしか外国雑誌を入手できなかった時代は終わりを告げ、現在では航空便で送付される雑誌も多くなった。とりわけ、STM(=SCIENCE.TECHNOLOGY.MEDICINE) 系の雑誌を中心に発行する欧米の大手学術出版社では、海外発送を航空便に限定するのが一般化している。

しかし、入荷スピードの改善は進められたとは言え、郵便途上での事故・破損等の発生は、依然として不可避である。一方、出版社の対応も、MTによる一括オーダーに対応するようなコンピューターシステムを構築するような出版社においてさえ、オーダーエントリーミスが皆無とは言い切れない現実がある。まして、手作業が中心の小出版社では、事務処理・発送処理でのミス発生を前提として、対応を考慮せねばならない。

これらにより発生する外国雑誌の欠号・未着の問題は、図書館、利用者のみならず、業者にとっても最も頭を悩ます問題であった。さらに、この受入処理、開封－チェック－巻号記入（入力）は、図書業務の中で最もわずらわしく、時間を要する作業であり、その合理化が待たれるところであった。

こうした中、近年開発された納入方法が、一括納入方式と呼ばれるものである。次にこの中身について触れていきたい。

3．一括納入方式とは何か

(1) 概　要

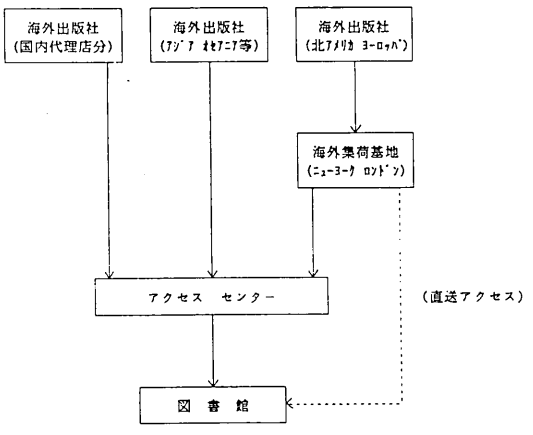
現在、一括納入方式としては、紀伊國屋書店のアクセスの他に、丸善のＭＡＣＳ２、スエッツ社のファーストといったシステムがある。これらの方式は、欠号防止対策と共に、図書室業務の軽減にリンクされているところに特徴がある。

直送方式との違い、および付随サービスは次のようになる。

① 出版社より読者へ直接送付されるのではなく、いったん海外の集荷基地へ集められた後、あるいはさらに日本の処理センターを経由して、週一回以上一括して読者へ送付される。

② 集荷基地にて、入荷チェックを行い、欠号管理が行われるため、読者は欠号クレームの業務より解放される。

③ 入荷チェックと同時にコンピューターに受入入力を行うため、ユーザーの図書館が機械化されている場合には、電子媒体で入荷データーの提供を受け、利用することが可能である。



(図１)　アクセス方式の雑誌の流れ

(2) 物　流

外国雑誌の重要誌の大半は欧米で出版される。たとえば、医薬関係の重要誌で欧米以外で発行されているのは、オーストラリアのBIOCHEMISTRY INTERNATIONALと香港の出版社、AIDS PRESSの出版物程度しか筆者は思いあたらない。したがって、雑誌の集荷基地は、アメリカおよびヨーロッパに置かれている。アクセスの場合は、ニューヨーク、ロンドンに集荷基地を設けている。ここは、日本への直行便数が最も多く、滞貨時間を最小限に押さえ、迅速な発送体制を組むことを可能にしている。

アメリカ、ヨーロッパで集荷され、東京へエアカーゴで直送されるタイトルの他に、その他の地域で発行される雑誌および国内代理店誌は、直接日本の処理センターへ送付される。処理センターでは、雑誌を顧客別に仕分けし、アルファベット順に並べ換えた上で、受入入力を行い、週一度宅急便にてユーザーへ発送される。

アクセスの場合、海外集荷基地の段階で、日本のアクセスセンターと同じコンピューターシステムで受入入力を行っている。そのデーターは現品と共に日本へ送られる。アクセスセンターでは、センターへ直接送付される分の受入データを海外集荷分のデータと統合し、再度検品の上、ユーザーへ送付している。

また、アクセスでは、一年目の海外集荷基地での受入入力の精度が99％以上という結果をうけて、今年より海外集荷基地より直送、ユーザーへ送付するサービスも開始した。エアカーゴでの一括納入システムによる納期短縮は一カ月程度であるが、直送サービスによりさらに一週間程度納期は短縮されている。

なお、ファースト方式の場合は、オランダ本社の関係上、全世界の雑誌はオランダへ集荷され、オランダよりユーザーへ発送されているようである。

(3) 欠号対策

外国雑誌は前払いを原則としているため、到着払いの洋書と違って、未着・欠号に対して我々業者も、多大の努力を費してきた。ユーザーも前払

いのケースが多いし、後払いの場合には入荷しなければ請求不能の状況に陥ってしまう。

しかし、結論としては、欠号の皆無はありえないということである。メイリングラベルが剝がれてしまうような単純な事故から、コンピューターによるエントリーミスのような複雑なものまで、欠号発生の可能性をゼロにすることは今後もむずかしいであろう。

近年、海外大手の学術出版社はコスト削減のために、業務を分業化した上で最も経費のかからぬ国へ業務を割り当てることが多くなっている。たとえば、TOXICOLOGY AND APPLIED PHARMACOLOGY などのタイトルで著名な ACADEMIC PRESS の本社は、アメリカのサンディエゴにあるが、印刷はベルギー、発送はオランダで行っている。こうなると、全号未着の場合、どの段階でミスが発生しているのか、流れを追っていかねば原因はつかめない。

一括納入方式は、海外集荷基地より直接エアカーゴにて日本へ送付する点においては、郵送上の事故を防止するものであるといえるが、基本的には、欠号・未着を早急かつ正確に発見し、出版社に対しクレームするという原則は変わらない。一括納入方式では、現品の受入作業を海外集荷基地および日本の処理センターで2度行うこととなっている。この際、欠号はチェックされ、クレームされる。さらにアクセスの場合、一定期間（雑誌により設定は異なる）未入荷のタイトルについては欠号監視システムにより、自動的にリストアップされ、出版社へクレームされる。いずれの場合も、ユーザーに対してはクレーム確認書が発行され、ユーザーはクレームされたことが確認できる。

日本で医学雑誌を購入する場合の一番の特徴は、国内代理店誌が非常に多いということである。国内代理店誌については、その代理店へオーダーし、雑誌は日本の処理センターへ直送される。これらを海外集荷基地にて集荷することは、流通形態を乱すこととなるので、紀伊國屋書店では行わない。

クレームについても、国内の代理店を通じて出版社へクレームされる。よって、それらのタイトルで発生した欠号について、補充されるスピードはその代理店の対応により異なってくる。紀伊國屋書店は、その代理店が日本の代理店としての機能を果たしていない場合は、出版社に直接クレームすることもある。代理店はできる限り、補充用のストックを常備する態勢を取っていただきたい。弊社の代理店タイトルについては、主要なものについて最低3～4部の欠号補充コピーをストックしている。

(4) 納入データ

外国雑誌の管理業務が煩雑にならざるを得ないのは、1タイトルごとの巻号を入荷のつど記録していく必要があるためである。たとえば、週刊誌の場合だと年間52回の記載を行わねばならない。

一括納入システムの場合、雑誌の納入データをコンピューターへ入力し、納品書を出力し、納入状況を管理している。当然、そのデータはフロッピー等の電子情報媒体による提供も可能である。

ただし、これを利用するためにはソフトウェアが必要である。すでにユーザーの側で、逐次刊行物管理のシステムを使用している場合には、そのデータを取り込むための変換プログラムを必要とする。アクセスおよびMACS 2の場合は、そのデータをそのまま利用できるソフトウェアを有料で提供している。このデータをうまく活用できれば、ユーザーはフロッピーのデータと受入雑誌を照合しさえすれば、受入業務は終了することになる。

4．価格体系

外国雑誌の価格については、従来、各通貨の実勢レートを基準に各レート毎に一定の換算レートを定め、そのレートで雑誌の原価（外価）を円貨に換算していくレート方式が主流であった。この場合、換算レートと実勢レートの差が業者の手数料となる。この方式では、雑誌誌代に比例して業者の手数料は増加する。

しかし、外国雑誌の価格を決める要素として、誌代のみをその基準とすることが、果たして合理的と言えるだろうか。雑誌の取り扱いに要する経費は、オーダー処理という部分においてさえ、MTで一括オーダーし、一括送金可能な大手出版社から、オーダーシートに一点一点、小切手を添付し

明 細 書　　93/06/07　　1頁 (B)

タイトル	誌代 (通貨 外価	手数料 X レート)	価格 部数	本体価	巻号 送付方法 [紀]商品コード ISSN 消費税	スタート 発行頻度 [紀]伝票NO 合計価	年間
(US) Proceedings of National Academy of Sciences					VOL.90	93	1
					P37400L(K)	S-M *N	
	¥46,729	¥31,751		¥78,480	93		
(D	420.00	X 111.26)	1	¥78,480	¥2,354		¥80,834
合計 :	¥46,729	¥31,751					
			1	¥78,480	¥2,354		¥80,834

(図2)　新価格体系の計算例

なければならない出版社まで、さまざまな格差が存在しており、それに要するコストは一律ではない。ましてや、発送処理、あるいはクレーム処理といった部分で出版社の対応は、歴然な差となって現れる。

一括納入方式は、価格体系の面でも従来のレート方式に代わって、新たに手数料方式が採用されている。この方式は仕入外価を実勢レートで換算して、誌代とし、各タイトルごとに設定した手数料を加算するものである。そのレートは、前月の実勢レートを入力しているので、レート変動に伴う差損・差益問題は発生しない。紀伊國屋書店は円高差益還元キャンペーン特集（読売新聞）でも数少ない優等生として報道された。また手数料は、弊社の場合、基本手数料および個々のタイトル手数料（価格、出版社、出版国、決裁通貨、刊行回数に基づく）にアクセス手数料（カーゴ代金および入力等の管理経費）を加算したものとなっている。この手数料方式は、各タイトルごとに安定供給するための経費を手数料としており、一般的に高額誌になるほど手数料率は低下する。

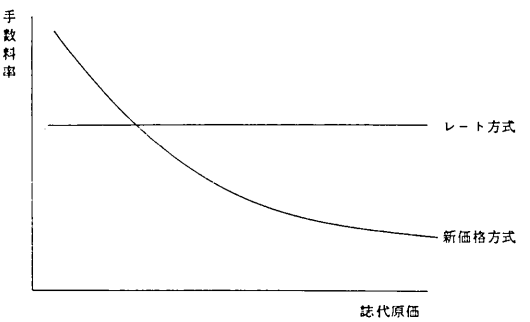
また、現地集荷を行っている関係上、国内価格あるいはＥＣ価格が誌代原価に適用されるケースがある。ただし、世界的な趨勢としては、販売地域による価格格差は撤廃の方向にあり、エルゼビア、パーガモンといった大手出版社では、1993年より世界統一価格となった。それでも、学会誌等では、国内価格と国外価格の差が1000ドル以上の価格差となるタイトルもある。

雑誌の仕入れに要するコストは多様であり、一律換算では反映できないことをご理解願いたい。新しい価格体系は、必要経費を価格に反映させるが、入手には万全を期することでユーザーと業者との信頼関係を構築するものである。

5．取り扱いの制限および条件

一括納入方式では、そのサービス水準の維持、およびこの方式ではかえって雑誌の持つ特性を阻害するようなタイトルを考慮して、取り扱いに一部制限を設けている。以下に列挙するものは取り扱い対象から除外される。

① 速報性が重視される新聞等の日刊誌。



(図3)　新価格体系の価格の概念

② 刊行回数が年1～2回と少なく、エアカーゴで運ぶ必要性のないもの。
③ カレント・コンテンツのディスケット版のように特殊なパッケージングが必要なもの。
④ 入荷管理が行えない、刊行遅延誌、刊行不定誌。

さらに、次のような条件がある。

① 取り扱いタイトル数　100以上
(MACS 2の場合、丸善のカタログによると)
② 取り扱い金額　500万以上(アクセス)
③ オーダー締切　10月末日

①②はある程度、量がまとまらないと宅急便の荷姿にならないためであり、③は、早期発注が欠号防止の基本原則になっているからである。

6．一括納入方式の長所・短所

最後にまとめとして一括納入方式のメリットおよびデメリットについて述べておきたい。

(1) メリット

① 雑誌業務の軽減化

i）従来、毎日のように送付されてきた雑誌を開封し、整理し、入荷記録をつけるという作業は不要となる。一括納入方式の場合は全て開封されており、入荷記録も業者より累積納品データを入手することで代用できる。

ii）宅急便の曜日指定が可能であるため、業務スケジュールの組み立てが容易となる。

iii）クレーム処理が不要となる。

iv）外国雑誌受入専任者が不要となる。

② 入荷のスピードアップ

SEA MAIL ONLY 誌がエアカーゴにより迅速に入荷する。たとえば、INDEX MEDICUS, JOURNAL OF EXPERIMENTAL MEDICINEのような重要誌もそれにあたる。

③ 国内価格の適用

前述のように、現地集荷の関係で原価が国内価格の適用を受けるタイトルがある。たとえば、かの有名なPROCEEDINGS OF NATIONAL ACADEMY OF SCIENCES の日本向け、航空便価格は 1,235ドルであるが、国内価格は 420ドルである。円換算すると原価レベルで約9万円の差となる。

④ 機械化の対応

受入データをフロッピーディスク等の電子媒体で提供可能であり、図書館コンピューター化の際には、受入入力を省力化できる。

(2) デメリット

出版社が航空便の中でもAIR MAILにより発送している雑誌の場合、一括納入では、直送に比べ到着は一週間から10日間位遅れる場合がある。したがって、速報性が求められる週刊誌（LANCET, NEW ENGLAND JOURNAL OF MEDICINE等）は、研究者のニーズに応じて直送を選択する方が望ましいケースもある。

7．おわりに

学術雑誌の流通媒体も、他の情報と同様、印刷媒体より電子媒体へ急速に移りつつある。今回の外国雑誌の新しい流通形態は、その過渡期にあって、活字情報の有用性を物流の面から商品価値を高めたものである。

病院図書室に勤務する方々が、医療に従事するユーザーへ外国雑誌の情報を提供するという役割を単に購入価格からだけではなく、利用者へのサービスの質、また図書室業務の合理化といった複眼的な視点より判断し、その中で一括納入方式への評価がなされることを希望したい。

そして、何よりも研究に必要な学術雑誌が安定的に供給されることが、最も重要なことと考える次第である。